

タングクリブにて開咬を改善した症例

○仁部郁代 岩崎智憲* 山崎要一*

倉元歯科医院 (宮崎県日南市)

*鹿大・院医歯・口腔小児

緒言：本症例は、長期間の指しゃぶりに引き続いて重度の舌癖を生じたため、歯列咬合形態を含む口腔領域に大きな影響が現れた女児である。混合歯列期に口腔習癖を排除するだけで良好な歯列状態が達成され、さらに正常な舌位や嚥下機能も獲得できたため報告する。

症例：咬合誘導開始年齢；8歳8か月(女児)

- ・主訴：上下の歯が咬み合わない。
- ・現症：指しゃぶりや異常嚥下癖、舌突出癖、咬唇癖を認め、口輪筋の弛緩により口腔軟組織の不調和を認める。
- ・顔貌および口腔所見：正貌は左右対称、側貌はストレートであった。Hellman の歯齢ⅢBで、overbite は5mm、overjet は4mmであった。上下顎歯列は顔貌の正中に一致し、臼歯関係は両側とも Angle I 級であった。

- ・模型分析：上顎歯列弓長径 40 mm

- ・側面頭部エックス線規格写真分析：

Mand. pl.to FH 31.5° L-1 to Mand.pl. 95°

Interincisal angle 113° U-1 to FH 122°

- ・咬合診断：指しゃぶりから重度の舌癖を惹起した歯性開咬症例

- ・処置および経過：口腔習癖の防止を目的として、上顎歯列にタングクリブを装着し、10か月で被蓋改善を行うことができた。その後、形態維持と習癖の改善のため T4K® を1年間使用し、3年経過した現在も安定している。

考察：幼児型嚥下から成人型嚥下に移行する時期に、タイミング良く歯列形態と口腔習癖の改善を行うことができたと思われる。鼻気道通気障害による歯列咬合形態への影響や骨格性要因が少なかったため、装置除去後も安定した結果を得られている。現在も発育途上であるため、定期的な口腔管理が重要である。

上顎永久犬歯の歯胚形成及び萌出方向について

○大隈由紀子¹⁾、山田亜矢¹⁾、湯浅健司¹⁾、
稲葉麻衣子²⁾、中村由紀²⁾、新垣真紀子¹⁾、田宮麗¹⁾、
福本敏¹⁾、野中和明¹⁾

(1)九大・院・小児歯 (2)九大病院・小児歯

【目的】上顎永久犬歯は、位置異常や萌出方向の異常を惹起しやすく、時には切歯の歯根吸収を引き起こすことがある。これまで上顎犬歯の埋伏および萌出遅延等について多数の報告があるが、正常な萌出状況の調査については殆どない。そこで我々は上顎犬歯歯胚の平均的な位置の統計調査を行うことで、将来的な永久歯列予測のための知見を得たので報告する。

【方法】当科受診の患者で、両側上顎中切歯が萌出完了し、異なる時期にパノラマエックス線撮影を行っている6歳4か月～12歳11か月の小児を調査対象とした。2つの時期の期間の平均は1年9か月である。これら2枚のエックス線写真を用いて、上顎犬歯の歯胚位置による分類である Sector 分類、及び犬歯の歯軸と正中線との補角である近心傾斜角度についての計測を行い、犬歯の萌出方向と位置の変化についての検討を行った。

【結果】初期計測時の Sector 分類では、約90%が S1、S2 であった。経時的変化に着目すると、約10%の犬歯に近心移動が認められた。初期計測時の近心傾斜角度では、0°～10°の範囲内にあるものが58%と有意に多かった。経時的変化では、初期計測時に0°～30°の範囲内にある歯に関しては、約80%が後の計測において、角度変化を認めない、または角度の減少を示した。

【考察】今回の調査では、犬歯は萌出に伴い経時的に方向・位置を変化させ、中切歯・側切歯の叢生や犬歯自身の捻転・異所萌出等を伴う症例もあったが、自然萌出する例を多く認めた。しかし、S4 に分類された歯は時間を経ても値に変化がなく、また近心傾斜角30°以上の歯で角度の改善が認められるものは30%程度にとどまっていた。従って、これらの歯に対しては早期の段階で萌出させるための処置が必要であることが示唆された。